



# 古代日中における非業死者と疫病をめぐる祭祀思想の研究 : 災因論の視点から [論文要旨及び審査の要旨]

著者	董 伊莎
発行年	2020-03-31
学位授与機関	関西大学
学位授与番号	34416甲第792号
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/00020221">http://hdl.handle.net/10112/00020221</a>

	[36]
氏 名	董 <sup>とう</sup> 伊 <sup>い</sup> 莎 <sup>さ</sup>
博士の専攻分野の名称	博士（文化交渉学）
学 位 記 番 号	東アジア文化博第 57 号
学 位 授 与 の 日 付	2020 年 3 月 31 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学 位 論 文 題 目	古代日中における非業死者と疫病をめぐる 祭祀思想の研究—災因論の視点から—
論 文 審 査 委 員	主 査 教 授 吾妻 重二 副 査 教 授 二階堂 善弘 副 査 准教授 池尻 陽子

## 論 文 内 容 の 要 旨

董伊莎氏の論文「古代日中における非業死者と疫病をめぐる祭祀思想の研究—災因論の視点から—」は、非業死者（横死者）の魂すなわち厲鬼（怨霊）が疫病を引き起こすとされる信仰と祭祀につき、そのメカニズムを中国と日本を比較しつつ論じた宗教思想史的研究である。

内容構成は以下のとおりである。

- 序 章 死者と災厄およびその接点をめぐる研究史
- 第一章 厲祭の歴史的展開
- 第二章 洪範系思想における厲
- 第三章 疫鬼と死者の観念における厲
- 第四章 敗軍死将としての厲鬼と道教
- 第五章 御霊会の由来再考
- 第六章 祟りのメカニズムと災異
- 第七章 死者観念と病因論における霊と鬼
- 第八章 国家的疫病対策における外来性と重層性
- 結 論 古代日中における非業死者と疫病の関係の特色と比較
- 参考文献

序章「死者と災厄およびその接点をめぐる研究史」では、非業死者を中心とする観念と祭祀につき従来の研究を総括し、論点を明確化する。これまでの研究は日本の御霊会にしても中国の厲鬼祭祀にしても、各国の民俗あるいは固有の信仰の範囲内ではばらばらに捉え

ることが多かったが、相互の病因論や鬼神観念には類似性が考えられるという。そして互いの特色を究明するために、疫病という公的災いの性格を考慮しつつ、国家レベルの災因論から考察する必要があるとする。

以下、第Ⅰ部（中国）と第Ⅱ部（日本）に分けて論が進められる。

第Ⅰ部では、古代中国における厲鬼の性格や厲鬼と疫病の関係を考察し、厲鬼祭祀の歴史的展開および思想的構造が論じられる。

第一章「厲祭の歴史的展開」では、礼典資料を用いて厲祭の歴史的展開が考察される。もともと厲祭は『礼記』などの記述に見られるように、漢以前は七祀や五祀の一部および民間の風習として伝承されてきたが、漢末から唐までの間には淫祠とされたために祀典に載せられなかったという。その理由として儒教的価値観における厲の観念の変化があると指摘する。厲には「子孫がない死者」と「悪しき霊」という二つの形態があり、礼典における厲祭の祭祀対象は前者だけであったが、後世、両者が混同されたためそのような結果になったという。

第二章「洪範系思想における厲」では、古代の厲祭記録に関して『左伝』注疏に見える「六厲之礼」の記述が検討される。『尚書』洪範五行伝の記述などの検討を通して、「六厲之礼」は「六沴之礼」を指すこと、「六沴之礼」という祭祀は厲鬼の祭祀ではなく、したがって「六厲之礼」も厲鬼に関する儀礼ではなかったことを明らかにする。

ついで、洪範五行伝の思想を継承した災異思想における疫病の認識や、疫病と非業死者の関係を検討する。そして、災異思想において疫病は必ずしも典型的な災異ではないこと、その位置づけも曖昧であると指摘する。その理由は、災異思想においては統治者の政治責任が第一義に求められるため、過失について統治者が罰を受けることの方が強調されるからであるという。

第三章「疫鬼と死者の観念における厲」では、疫病鬼神の厲鬼と人鬼の厲鬼の区別を『日書』や楚簡など先秦時代の史料および讎儀において検討し、厲鬼の非人格的一面を明示している。さらに、祖先と非業死者の関係を内鬼（親族）と外鬼（あかの他人）の視点で分析し、その思想的根拠を解明している。

第四章「敗軍死将としての厲鬼と道教」では、漢末六朝時代に盛んだった厲鬼信仰の二つの展開ルートを究明する。まず、蔣子文らのような敗軍死将の神格の展開を分析し、さらに『女青鬼律』や『洞淵神呪経』など早期道教教典における敗軍死将と魔王の習合現象やその神格の特色を分析した。その結果、厲鬼信仰の展開には憤慨や怨恨の性格を捨てて正当な神に昇格するルートと、疫鬼を管理・退治する強力な神に変身するルートの二つがあることを明らかにする。

第Ⅱ部では、古代日本における非業死者（御霊）と疫病の関係を分析し、中国の影響もあわせて考察する。

第五章「御霊会の由来再考」では、御霊の性格や御霊信仰の起源をめぐって、貞観5年（863）の初回御霊会とそれ以降の民間御霊会を取り上げて比較する。そして、初回御霊会

については『朝野群載』の「天下疾疫間事勘文」を手がかりに検討し、『左伝』の伯有と子産をめぐる鬼神観から影響を受けつつも、新たに疫病の要素をつけ加えて成立したとする。また、民間の御霊会が祭る祭神は「唐朝神」など外来の神であった可能性を指摘する。

第六章「崇りのメカニズムと災異」では、御霊信仰と密接な関係があるとされる崇りについて考察を行う。記紀神話や「六国史」に見える崇りの事例を網羅的に精査、整理し、崇りのメカニズムを構造的に解明するとともに、御霊信仰との相違点を指摘する。また中国の災異思想との比較を通して、崇りにおける政治批判という機能の欠落についても論じている。

第七章「死者観念と病因論における霊と鬼」では、私的な場における貴族個人の病因認識やそこに見える怨霊の位置づけについて検討する。日記に見えるモノノケに関する記録を分析すると、モノノケという概念の性格が曖昧であるため病因の主体は多様であり、しかもその中で怨霊の存在は顕著ではないという。一方、個人が疫病にかかった場合、疫病をもたらす鬼という概念が出てくるが、その性格はこれまた相当曖昧である。このことにより、当時の貴族たちは多様な病因の主体を意識していたが、疫病鬼神としての人鬼という概念は明白ではなかったとする。

第八章「国家的疫病対策における外来性と重層性」では、国家的災異対策における疫病鬼神の性格について検討する。まず、律令国家の災異対策は疫病に特化した場合と疫病に限られない場合に分けられるとしたうえで、律令格式の条文やその解釈書に見える疫病に特化した諸祭祀における祭神は外来神であると指摘する。外部から伝来した、これまでにない疫病が現れたため、これに特化した対策が講じられるようになったのだという。

結論では、Ⅰ部とⅡ部の検討を踏まえて古代日本・中国における厲鬼・怨霊と疫病の関係を中心とする災因論の構造を比較し、両国のこの分野における祭祀思想の特色を整理している。

## 論文審査結果の要旨

董伊莎氏の論文は霊魂と災いをめぐって古代中国と日本の祭祀思想を研究したものであり、具体的成果としては次の四点を挙げることができる。

第一に、中国の厲および厲鬼観念に関する広範な検討がある。儒教や経書、『洪範五行伝』と災異思想、『日書』や楚簡など先秦時代の史料、民間信仰、そして道教といった諸領域に大胆に踏み込み、多くの資料を用いつつ詳細な考察を行っている。ここには儒教とか道教とかいったこれまでの研究枠組みを超える重要な視点と論及があり、厲鬼をめぐる宗教・祭祀思想の総合的な研究になっているといえる。

第二に、信仰の歴史的展開をていねいに追っていることである。先秦時代から漢代、六

朝、唐代に至るまで中国の宗教思想の展開の中で、厲鬼信仰がどのように変化していったのかが論じられている点が貴重である。とりわけ儒教における厲のとらえ方の歴史の変遷や、六朝期において厲鬼が敗軍死将のような祟り神に変化すること、それが道教の中で正当化された神となり、また魔王のような疫鬼を管理・退治する強力な神に変身するといった指摘は、宗教思想史の展開としてきわめて精彩がある。

第三に、日本の御霊や祟り神、モノノケといった類似の観念およびその祭祀について仔細な検討を加え、その共通性と違いとを明確化していることである。特に祟りについて記紀神話や「六国史」に見える祟りの事例をすべてとり上げて整理したこと、「天」という概念が日本に定着しなかったため、災いが中国の災異思想と違って天からの譴責ではなく神祟りとして読み替えられたという指摘は興味深い。

第四に、日本の御霊会と中国の関係についての指摘がある。貞観5年の初回御霊会が中国の鬼神祭祀の影響を受けていること、天平年間の疫病祭祀で祀られる神は、海外からもたらされた疫病の流行を背景にした外来神と推定されることがそれである。このことは従来も一部の研究者によって指摘されていたが、董伊莎氏は日中の資料を広く検討していて重要な指摘となっている。

このように、董伊莎氏の論文は従来の研究にないすぐれた内容をもっている。問題点としては、『論衡』や『風俗通』に記された民間の信仰の姿などをもっと考慮する必要があったかもしれない。また、さまざまな要素を検討しているため、時として論旨の展開が追いつくという点もある。論文冒頭に非業死者と疫病の関係を示す典型例をまず示したうえで、それとの距離を測っていくという論じ方をとることも考えられる。このほか、日本の御霊信仰における中国からの影響および相互比較についても、調査と分析の精度をいっそう高めてほしいと希望する。

しかしこれらは今後ある程度修正可能な問題であって、中国と日本にまたがるこのような包括的研究に取り組んだことは高く評価できよう。この意欲作によって明らかにされた知見を起点に今後、中国と日本の鬼神信仰研究はいっそうの展開が期待できると判断されるのである。

よって、本論文は博士論文として価値あるものと認める。